

「現代衣服の源流」を遡る

—— 日本におけるファッション展の成立について

平芳 裕子 (神戸大学)

本発表は、ミュージアムにおけるファッション展が日本でいかに成立したのか、その歴史的経緯を明らかにすることによって、芸術文化におけるファッションの展示の意義を考察するものである。

ファッション展とは、概して西洋由来の衣服及び装飾品を展示する展覧会のことを指す。欧米では主に美術館の装飾美術部門において、テキスタイルや服飾品の収集・保存・展示が行われてきたが、近年では歴史衣装だけではなく、現代のファッションデザイナー展やファッションブランド展も行われるようになった。ファッションのグローバル化とともに、西洋のファッション展が各国へ巡回し、日本でもさかんに開催されるようになった。だが、日本におけるファッション展の発展について考察した研究は数少なく、歴史的な検証が必要であると考ええる。

従来、日本のファッション展の嚆矢とされてきたのは1975年に京都国立近代美術館で開催された「現代衣服の源流展」である。これはメトロポリタン美術館コスチューム・インスティテュートの特別顧問ダイアナ・ヴリーランドの企画による展覧会を巡回させたものであった。20世紀前半のファッションデザインを取り上げたこの展覧会の成功を受けて、京都服飾文化研究財団が設立され、西洋服飾の収集・保存・展示が行われるようになった。それから同財団は、西洋の歴史衣装の紹介、服飾による東西交流、現代のファッションデザインなど数々の展覧会を企画し、日本におけるファッション展を牽引してきたといっても過言ではない。ゆえに、同財団設立のきっかけとなった「現代衣服の源流展」が日本のファッション展の始まりとみなされてきた。しかしながら日本のファッションの展示は、海外からパッケージとして移入された同展覧会をもってして突如始まったわけではない。日本の近代のファッションが、日常着としての着物の衰退と「洋服」としての受容との関係性のなかで生まれてきたように、着物の展示からの洋服への展示の変化のなかで、流行を伴うファッションも展示的な価値と文化的な意義を認められるようになった。

そこで本発表では、失われていく伝統文化の保存としての着物の展示とともに、日本におけるファッション展がいかに胎動したのかを明らかにする。東京国立博物館における服飾特別展覧会、東京繊維会館における西洋服飾のレプリカ展、三越呉服店における民族衣装の展示などの事例を現存する資料、図録、写真等をもとに辿りながら、明治以降の日本の展示のなかに「現代衣服の源流展」を位置づけ直す。そして、日本の洋装化の歴史的な文脈のなかでファッション展がいかに成立し、20世紀末以降のファッション展の人気もたらされるに至ったのか、その道筋を示す。